

臆解 「撃ちてし止まむ」

市川浩

前の大戦初期、我小學四年生の頃「撃ちてし止まむ」の標語耳にすること屢々なりき。その正確なる意味克く解し得ざるも、米英撃滅を了ふるまで戦ひを止めずとの宣言なるらむと思ひをりき。その後戦局暗轉し、遂に敗戦、戦前の完全否定の戦後の時代續きてこの間約七十年、何時しかこの標語も聞く無きに至れり。最近縁ありて、日本書紀を講讀するあり。その卷第三に至りてこの標語に接す。讀解を試みる中、驚くべき内容に遭遇す。

一般に「撃ちてし止まむ」は古事記中卷神武天皇紀久米歌の條を出典とし、八十建や登美毘古を撃たむとし給ひし折の御歌の中、

一 忍坂の 大室屋に 人多に 來入り居り 人多に入り居りともみつみつし久米の子が 頭椎い 石椎い
もち 撃ちてし止まむ

二 みつみつし久米の子らが 粟生には 臭葦一本そねが本そね芽撃ぎて 撃ちてし止まむ

三 みつみつし久米の子らが 垣下に 植糸し 椒 口ひひく 吾は忘れじ 撃ちてし止まむ

四 神風の 伊勢の海の 生石に 這ひもとほろふ 細螺の い這ひもとほり 撃ちてし止まむ
の 四首に詠み込まれぬて、「攻め滅ぼしてしまふぞ」の意とせらる。

一方日本書紀に於ては卷第三神武天皇即位前紀戊午年十月癸巳朔 並びに同十有二月四日の條に、右記四首が四、一、二、三の順に所載あり（但し語句に若干の異同あり）。特に四の歌は書紀では其の由來の詳述があり、これを本文を一部引用（括弧内）して略述すれば左の若し。

「天皇菟田の高倉山の巔に陟りて域の中を瞻望りたまふ」に「賊虜の據る所は、皆此要害の地に於て」
して「道路絶え塞がりて、通らむに處無し。天皇惡みたまふ。是夜、自ら祈ひて寢ませり。夢に天神有して」の訓へに従ひ、「天香山の社の中の土を取りて」、「八十平瓮・天手抉八十枚、嚴瓮を造作りて、丹生の川上に陟りて、用て天神地祇を祭りたまひ」、また祈ひて「吾必ず鋒刃の威を假らずして、坐ながら天下を平けむとのたまふ。かくて兵を勅へて、先づ八十梟帥を國見丘に破り斬る。「是の役に天皇志、必ず克ちなむ」と乃ち御謠して曰く」とて、古事記より句の多き

神風の 伊勢の海の 大石にや い這ひ廻る 細螺の 細螺の 吾子よ 吾子よ 細螺の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ 撃ちてし止まむ

續けて「謠の意は大きな石を以て其の國見丘に喩ふ」とありて、茲に豁然として臆解を得たり。即ち、天皇は天神地祇の力を藉りて、惡しき地域支配者を師によらず排除できるとの確信を此の御謠に詠みたまひけりと解すべきに非ずや。先づ神（伊勢）、國見丘（大石）とそこに住む民草（細螺の吾子）を呼出し、八十梟帥を神威によりて除いた今、是まで「這ひ廻ら」ざるを得ぬ苦難が了る事を「撃ちてし止まむ」と謠ひ給ふなり。

文法的に言はば「撃ち」の主語は神であり、其の連用形に完了の助動詞「つ」の未然形と上代の尊敬の助動詞「す」の連用形「し」が接續し、結びの「止まむ」の主語は細螺の吾子の苦難であり、口語譯としては「神が賊を撃ち滅ぼして下されたので、是までの苦難は了るに違ひない」とならむ。

なほ一の歌のみは道臣命の作であるが、頭椎い 石椎い（何れも武器）に神が宿るを歌ふは、流石後代の大歌人、旅人、家持の遠祖の面目が宿る。

紀元二千六百七十六年の建國記念の日、神武天皇の詠み給うた御歌を拜讀の次第を記す。

(平成三十年三月十五日受附)